

2. 吉原栄「私の八十年」

(4) 1943 年（昭和 18）～1945 年（昭和 20）

③ 1945 年：満州時代 第 9 年目 昭和 20 年（前号の続き）
「当時の大連と布教所」

当時の大連は治安も悪く、略奪、暴行が横行して、日本人の生活も悲惨だった。女性は髪を切り、男装して身を守ったともいう。布教所のあった松風台は高級住宅地で、何度も略奪されたということだった。布教所にも略奪者が来たが、神床を見て「ここは神様だ」と言って何も取らずに出て行ったという。吉原氏の留守中に、2 人の子供を抱え布教所を護っていた妻の安子姉は、その頃のことを詳しくは語ろうとせず、吉原氏もその苦勞が察せられて、尋ねることができなかったという。しかし、後におたすけ先でその頃の妻の様子を聞き、よくやってくれたと、自分の苦勞が吹き飛ぶほどうれしく、たすけて下さった教祖に改めてお礼を申し上げた。報国農場で知り合った人々も、留守中に足繁く布教所に入りしてくれ、力になってくれたということだった。

(5) 1946 年（昭和 21）～1947 年（昭和 22）

① 1946 年：満州時代 第 10 年目 昭和 21 年

この年、おぢばでは教祖 60 年祭が 1 月 26 日から 2 月 18 日にかけて行われ、管長は真柱と復元された。第 1 回集会員選挙が行われ、歪められて来た信仰体制の変革に取り掛かった。一方、社会では 1 月早々に「天皇人間宣言」があり、5 月には「東京裁判」の審理が始められ、11 月に新憲法が公布されて、新しい時代へと大きく動き始めた。

しかし、当時大連では交信方法もなく、日本国内の情報は何も分からないばかりか、歪められた嫌な話ばかりで、不安と生活苦が募るばかりだった。

妻の安子姉は終戦前後の混乱の中、頼ってくる人は多かったが、自分が頼る人はなく、ひたすら教祖を目標に必死の頑張りであった。衰弱した体力の回復はもっぱら落花生だったという。それだけは豊富にあり、出かける時も、いつもポケットに入れていた。安子姉は次女をおぶり、長女の手を引いて、1 里あまりの道をおたすけに通ったという。しかし、夕方おたすけから帰ると、疲労困憊で子供をおろす意気地もなく、おぶったままいつとき休み、それでも子供が待っているからと、気を取り直して夕食の準備にとりかかるのが辛かったと話したことがあった。しかし、そんな中で何よりも辛かったのは、やはり次女の出直しだった。

吉原氏が帰還できて、妻は一時元気を取り戻したが、それまで張り詰めていた疲れからか、我が子を失った悲しみからか、休む日が多くなった。暖かなれば良くなるかとも思ったが、逆に日に日に衰弱していった。これを見た同郷の先輩の奥さんが、大連病院の院長を伴って訪ねてくれた。当時、大連病院はベッド数 700、1 日の外来患者は 1,000 人を越すと言われ、最高の設備を持つ東洋一の大病院とも言われていたが、どんな関係でその院長を連れてきてくれたのか分からなかった。診察の結果は、極度の疲労で肺が侵され、もはや手の施しようがないというものだった。

吉原氏は何としてもたすけていただきたいと思った。親神様、教祖にお願いするとともに、どうしたらいいかと悩んだ。とにかく栄養になるものかと思ったが、その日の食にも事欠き、行き倒れさえ出ている世上だった。せめて白米のお粥でもと思い、米を買ったところ、その中には白砂が 3 割も 4 割も混ざっていた。机の上に広げ、一粒ずつ選り分けた。このようなことは砂糖でも起

こった。中にガラスの粉が混ざっていた。

多くの人々がいろいろと心を寄せてくれたが、安子姉は 5 月 13 日に出直した。昭和 16 年の結婚以来丸 5 年、時に 33 歳だった。次女に続き、妻が出直し、吉原氏は長女と 2 人となった。母を失った長女のさびしさを何とか紛らわせてやらなければならなかった。大連には出征した夫の留守を守り、生きるのにやっとの辛い日々を送っている人々がいる。吉原氏はこんな時こそ、自分が心の支えになることがようばくの使命だと考え、長女を連れて人々を励まして回り、おたすけもした。それは人々を励ますと共に、自分の心を励ますことでもあった。吉原氏はいつも皆が引揚げるときは、必ず残って皆を守るからと励ましていたが、この年も遂に引揚げ船は来なかった。

② 1947 年：満州引揚げ 昭和 22 年

新しい年を迎えやっと引揚げ船が来た。布教所関係者では竹中姉親子が第 1 陣だった。以後、次々と配船され、布教所関係の人々は 3 月 25 日の清水嘉友親子を最後に、すべて引揚げることができた。しかし、出征した人々は、まだ誰も戻って来てはいなかった。

吉原氏は 2 月初旬の船に乗るように指示された。神床をはじめ、全ての物を残したまま、2 柱の遺骨と、長女の手を引いて、身に着けられるだけの物を持って出発した。書類や写真の持ち出しは一切禁じられていた。大連は修行の場で、10 年過ぎたらヨーロッパへ布教しようという夢は、ちょうど昭和 12 年に大連に渡ってから丸 10 年経って、その行き先は母国となり、満州との別れとなった。

船中は皆同じ引揚げ者で、いろいろな噂話を聞いた。凄惨な話もあったが、吉原氏は遺骨と子供を守ることに専念し、一切関与しなかった。そして、2 月 22 日に無事佐世保に上陸できた。親神様、教祖にお礼を申し上げ、大きく息を吸うことができた。この時吉原氏は 32 歳、いろいろな体験を重ねて第 2 の人生に入ることになった。それは、荒道開拓の海外布教の夢は一時中断して、日光の人となり、大教会の人となることだった。

おわりに

吉原氏は引揚げ後、亡き妻の兄に当たる理実分教会の丸山時次会長から長女を預かるとの申し出を受け、一人日光大教会に戻り、御用を勤めることになった。しかし、引揚げた年の秋に長女が出直してしまう。深い悲しみの中にありながらも、悲しんでばかりはいられない立場に立っていた。それは巡教先で吉原氏の話に共鳴し、来訪を待っている人々や、不思議なたすけを頂いて、喜んで待っている人々がいたからだった。家族をすべて失うという大きな犠牲、その伏せ込みを無駄にはできないという思いから、何としても悲しがってはいられないという気持ちになった。そして、それが第 2 の人生の推進力となり、前よりも一層御用に熱が入ったと記している。

その後、吉原氏は再婚され、子どもにも恵まれて、大教会役員として活躍し、多大に貢献された。そして、2002 年に出直された。

本稿を終えるに当たり、紙面をお借りして、貴重な資料を提供してくださった御夫人の吉原タイ様と、長期にわたり拙稿に目を通してくださった御令嬢の吉原みよ子様に心より御礼申し上げます。最後に、これまで拙稿にお付き合いくださりありがとうございました。今回で連載は区切りとなりますが、今後も資料収集を継続していきます。もし、戦前の海外伝道に関する記録文書や写真、新聞記事などご存知でしたら、ぜひご連絡ください。